

＜今日の説教のポイント I コリント 14 章 26-40 節＞

正しい信仰が造り上げられるための、ふさわしい礼拝とは。

1 (26-33a) 今の礼拝と違う？ その理由は？

紀元 50 年頃の初代教会の礼拝の様子を知ることができる箇所です。それぞれ自分の賜物を用いて参加したようです(26 の直訳：それぞれが、讚美歌、教え～解釈を持っている)。特に複数の人たちが異言や預言を語り、それを解釈したり検討したりする人もいたようです。牧師一人が御言葉の解き明かしをする今の礼拝と違います。どう考えたらいいのでしょうか？ パウロがここで全体的に抑制する方向の指示を与えている点が重要です(33 秩序と平和)。全員参加型で始まった礼拝ですが、混乱が生じ出したのです。いつも言うように、聖書は、「聖書のどこそこにかこう書いてある」ということを探すより、それがどう変わって行ったか、それはなぜなのかを考え、福音(聖書全体から出て来る教え)から見て辿り着く答えを捉える読み方をすることが大事です。今の礼拝も色んな経過を経てたどり着いた礼拝であるのです。例えば、説教者は自分の頭で思ったことを語るのではなく、聖書が何を伝えようとしているかを正しく伝えるために神学校に行き、学び、語る重い責任を負っているのです。また、牧師がその務めをちゃんと果たしているかをチェックする(29 検討する) 務めを負う長老の責任も大きいのです。

2 (33b-40) 目指すは、御言葉にしっかり耳を傾けて捧げる礼拝。

ここも書いてあることだけ読めば、パウロは女性を見下していると思うかもしれませんが、しかしパウロは、女も礼拝で祈ったり預言したりすることを認めており(11:5)、それ自体、二千年前の社会では画期的なことです。ここに出て来る「婦人(既婚者)」はおそらく礼拝を混乱させる発言や質問をしたので、パウロは「質問があったら家で夫に聞いておきなさい」と言っているのだと考えられています(35)。

パウロは最後に、預言すること(聖書の福音を冷静に語ること 29 大事)を勧めています。異言を禁じてはならないとも言った後、「しかし、すべてを適切に、秩序正しく行いなさい」とまとめて終わります(40)。私たち人間が捧げる礼拝には色んなことが生じて来ますが、目指すは、御言葉にしっかり耳を傾け、その内容に感謝と讚美を捧げる礼拝です！